アメリカ点点

瀧由之介

異才の俊鋭、注目の佳品集 ……

■現実と非現実の間を自在に行き交う達意の文体によって、生存の重荷を照射する新しい文学の成果

〈神無書房・発売〉 ¥550

アメリカ点点

瀧 由之介

前衛社

瀧由之介
昭和2年　千葉県生
早稲田大学仏文科中退
「パーカー氏空間」で第9回
中央公論新人賞佳作
著書
「ピカソの指」
「腐蝕したブリキの月」

アメリカ点点

一九七一年六月一五日発行
定価五五〇円

著者　瀧由之介
発行者　常住郷太郎
装幀　山本美智代
製作　前衛社
発売所　神無書房
東京都千代田区九段北一―一三―六
電話（〇三）二六一―九〇〇三
振替（東京）四〇〇八二
〒一〇二番

印刷　浩文社
製本　青木製本工業

© 1971. YOSHINOSUKE. TAKI
落丁乱丁本はおとりかえします

林檎 5
笛彦 39
アメリカ点点 159
ふるふるの町 195
紙・真赤な卵・影・毛・花・水・保存館
あとがき 264

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

アメリカ点点

林

檎

a

ほんものの飛行機が見たい、と息子が言ったので、私は彼を竹籠の中に入れ、それを自転車のうしろの荷台に縛り付けて、午後の田圃道を走って行った。

私の家は舗道沿いのささやかな街並にあって、しばしばトラックの地鳴りに仰天させられるが、裏は、足許から田圃が拡がっている。それで、冬が去りかけると、磁石盤の針の揺らめきのように田圃の方角が気になり出すのだった——私は静寂を、息子はオタマジャクシの卵のために。

ふたつの部落——その一つは、地価に値が出て、にわかに派手な屋根が顕れ、農家の庭に赤

いズボンが下がったりしていたが、もう一つのほうは、奈良時代からずうっと膝を折り腰を落としている獣のように、じいっと、暗い聚落であった——を通り過ぎてしまうと、あとはただ、冬のいましめから解かれた田の面の、その淡い匂いばかりとなって、私の榜ぐペダルの音が、ことさら耳についた。

スピードを出すと音が消えるのに、ゆっくり踏むと錆びた音が立つのだった。

ひときわ高く錆びた音が立つと、それが大きく耳に熟して、まるで啜り泣く何物かが耳朶に触れてくるようだった。

田畑はもとより、空も木も、いつの間にか春めいて、遠近の菜の花畠が、天からまっすぐ降りて来た黄いろい火玉のように燃えている。

しかし、もう四時に近く、空には陽のおとろえが顕れていた。よく見ると、間近の菜の花のかたまりは、そんな空のおとろえをそのままに吸い取って、おのれをさらに自若と光らせているのだった。

その明るさが、あたりの電柱、電線、人影、遠いシグナルを一層暗く古典的に鎮めているのが分る。

そんな明るさに沿って進んで行くと、私達も、私達を運ぶ自転車も、だしぬけに百年ほど年老いてしまうのが感じられる——自転車だけはそれからなおも老い続けて、千年も深け込み、機械生活から脱け出し、より生物的な暮らし向きのほうへどんどん走って。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私は、不意に、存分の大声を出していた。
「すっかり、春だなあ！」
おそらく漫画だったら、その一声の噴射で私達の自転車は空中浮揚を遂げ、地球がマッチ棒の頭ぐらいに見えるまで遠のいて行くだろう。
しかし、私は地面にいて、顔とハンドルの両手に顫えが立つほど力を籠めているだけだった。
「びっくりしちゃったよ」
と、うしろで息子が言った——私の背の右の方に顔を伸ばして、私がどうかなったのではないかと案じながら。
「そうかい？」
息子の方角に顔を振り向けて——しかし右の瞼のはじっこに息子の頭がちらり浮かんだだけで、どちらかと言えば、息子を安心させるために私の顔を見せてやったようなものだったが——私は皺苦茶に笑った。
その笑いにも、何故か、笑いを引き伸ばすための奇妙な力が籠るのだった。
私は、白熱した笑いの尾を曳きながら、明々（あかあか）と付け加えた。
「どうして、びっくりなんかするだろうなあ？」
「だって」と息子の声も明るくなった。「急に大きな声を出すんだもの。でも……いっぱい

は、びっくりしなかったよ」
「どのくらいびっくりしたのかな？」
「猫ぐらいだよ。あしたね、猫が庭のところを歩いていたんだよ……」
「あしたでなくてきのうと言わなくちゃ」
「あ、いけねえ。きのう、きのうね、猫が歩いていたんだよ、庭のところを。僕がラッパを吹いたんだよ。猫がびっくりして僕を見たんだよ。だけどね、もう一度吹いたら、猫が笑ったよ」
「なんだって？」
「あっ、何か変なのが落ちてるよ」
「あれ、かい？　インク壜の蓋だよ。つまんないさ、あんなもの——何が笑ったんだって？」
「猫が笑ったんだよ」
「笑ったのかい？」
「うん、笑ったよ。こんなふうな顔して」
「どんなふうな？」
「こんなふうな……」
息子は眼を丸め、鼻梁の付根に際立った皺を三本浮かべた。三本目は浅く刻まれてひどく短かったので、本当は二本半かもしれない。

そうして、眼を丸める力と、鼻を縮めようとする力と、互いに方向が相反するから、彼の顔には酸味が溢れた。私は苦笑した。

「そいつは凄いや、猫が――あっ、いいかい、籠にしっかり掴って」

自転車は無人踏切の枕木と二本のレールの上を揺れて渡った。まるで自転車の荷台にガラスの人形でも載せてあるみたいに、そろり、と。

それから、見事に区画整理された田の間のゆるやかな坂道を、ペダルを踏まずに下りはじめた。

乾いた坂は、長くて快適だった。

眼玉からも鼻孔からも、田の風がストレートに流れ込んで、頭蓋のなかの、脳味噌の袋をはたはたと打つのが感じられる。

肌の毛穴から射し込んで来る風は、じかに骨に触れてくることもある。そんな時、骨は白く光って、柔らぐ。

私は、背後の息子を、ふっと、骨のかたちで感じていた。そうして妻の軀も、骨のままに見えはじめた。

それらすべてに、春の風が触れながら、めぐりめぐっている。私と息子は大声で歌い出した。

童謡の合間に予科練の歌を唄った。『ここは御国を何百里』も唄った。息子が生まれた時か

らずうっと唄い続けて来た軍歌なのだ。
といって、予科練や軍隊にいったことはない。そんな年嵩(としかさ)ではなかった。ただ、遠く近く、その歌を耳にして、私も育ったのだ。
私の声は、息子の声の三倍ほどでかでかと噴いて出た。ともすると、息子の声が聞こえなくなる小節もあったが、それは息子が歌詞を忘れているせいばかりとは言えなかった。
私の大声を——私の骨まで響き鳴らす大声を——怖れ憚っているふしもあった。
やがて、はるかな暗い屋根屋根の切れ目に飛行場のけはいが浮かび出た。
かなり前から、瞼の片隅に、砂の一粒が懸ったような感触があったが、白い塊りが一つ、きらり、現れた瞬間から、それは眼にしっかり灯(とも)った。

b

しかし、どうしたわけかアメリカ軍基地の飛行場には、いつもぴかぴか光って立っているジェット機が一つもなかった。
「今日は、休みらしいな」
と、私は言った。
「損しちゃったね」

と、息子が受けて、もう一度飛行場を見るために私のうしろから顔を伸ばした——嘆息を横隔膜からじかに吐き出して、私の背の左の方に吹きかけながら。

「きっと、みんな、ほら……」

ことさらに声を張って、私は指差した。指の先で三重丸を描きながら。

「あの格納庫、あのでっかいお家、のなかに入っちゃってるんだ」

「ふうん」息子の声は傷ついていて、幾分うつむき加減であった。「どうして休みなんかにしたんだろ？」

けれども、語気を殺がれるほどのことはなかった。

振り向いて眺めるまでもなく、そんな傷ついた声の波間に、ある格別な、息子の姿が浮かび出ている——幼年から少年に移りかけた童子がふと見せる、あの、ぽかんと、空に突き出した鉄塔のような孤独が。

「恐らく、くたびれちゃったんだろう、飛行機も」

と、私はうわの空で答えていたが、くたびれちゃったという言葉の音韻だけ、軀にずっしりと触れて来た。

私達は、飛行場沿いの舗道へとぶつかり出て、それを右へなぞり曲がった。

人影も車も絶えて、砂埃は舗道の面にじいっと停っている。

ゆっくりペダルを榜いで、舗道に落ちたおのれの影の、幽かな厚みを踏んで行った。

舗道と基地との間に二十メートルの濠があって、静かな水面に、じいっと釣糸を垂れている男もいた。

ずぶの素人ではないふうに身をこしらえて、水の静けさにおちこんでいたが、その背にバス・ストップのポールが触れている。

白ペンキが剝がれ、木目の露出したポールであった。それは舗道の毳立(けばだ)った埃の上に、ふてぶてと一筆書きの影を染み込ませている。

私の視線が、水、男、ポール、そのポールの、というように滑り流れて行って、入日さながらにそのポールの影のなかへ没してしまったのが分った。

ポールを過ぎてしまうまで、私は自分の視線をポールの影から抜き取ることが出来なかった。が、不意に抜き取れた時、その視線は、深い古井戸から還って来たみたいに、妖しく湿っていた。そうして遠く、飛行場の空を見た。

ああ、わからないな、と私は呟いていた。

「なあに?」

と、息子が受けていた。

「いや、わからない、と言ったのさ」

「何が?」

「何がって……その、何が、がお父ちゃんにもよくわからないんだよ」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com